

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

大村しげ寄贈品における女物和装履物についての報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 磯, 映美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001449

7. 大村しげ寄贈品における女物和装履物についての報告

磯 映美

1 はじめに

本稿では、民博に収蔵された約1万5000件の品々の中から今回は女物和装履物、下駄と草履に注目する。というのも、大村しげさんの遺言の中に「ちびた下駄も捨てんといて」というコメントがあったためである。おそらく「ちびた下駄」という例は、一般には捨ててしまうようなものまで残しておいてほしい、という象徴的な意味で使われたのだろう。しかし、比喩としてあげられただけであったとしても、わざわざ下駄を引き合いに出したのは、何か心に引っかかっていたからなのかもしれない。また、その発言がなかったとしても、ある特定の個人が使用した和装履物をまとめて観察できる機会である。そこから何が見えてくるだろうか。

大村さんが病で倒れたのが1994(平成6)年。観察対象となる履物はおそらく、それ以前に購入・使用されたものと考えられる。当時76歳だった京都女性が日常的に履いていた和装履物を詳しく観察し、その使い方や維持管理の特徴などについて考察したい。

考察に際して注目した点は次の通りである。

- ① どこに何がいくつあるか、数える。
- ② 使用痕を元に「未使用」「使用済み」「使用中」に分類する。
- ③ のし紙の有無に分類する(贈答品としての履物からの視点)。
- ④ おおよその生産・流通年代の推定。
- ⑤ 1994年時点で使用中であったと思われるものを考察する。
- ⑥ 1994年時点で未使用であったと思われるものを考察する。
- ⑦ 1994年時点で使用済みであったと思われるものを考察する。
- ⑧ 使い方、購入のしかたについて考察する。

2 考察の結果

2.1 どこに何がいくつあるか

データ表から女性用和装履物(下駄・草履)を抽出したところ39点あった¹⁾。地下室、2階、オクノマの3ヶ所に大部分(38点)が所在したが、搬出時の混乱でもととの所在が不明となったものも1点あった。以下、収集番号昇順に述べる。

- ① 不明であるのは、収集番号 4173 の下駄 1 点のみ。
- ② 地下室にあった、収集番号 7720～7743 に含まれる草履 1 点・下駄 8 点、計 9 点。
- ③ 2 階には、収集番号 11971 の下駄 1 点のみ。
- ④ オクノマにあった下駄箱の中には収集番号 12155～12188 に含まれる草履 19 点・下駄 9 点、計 28 点があった。大村さんの同居人、鈴木靖峯さんからの聞き取り調査により、ここには「外出用の履物」が納められているとのこと。

2.2 どのようにあるか——使用痕を基準に見る

上記を部屋別に、未使用・使用済み・使用中の 3 つに分類してみた。分類の基準は「未使用＝全く使用痕がないもの」「使用済み＝見るからに汚く損傷の激しいもの」「使用中＝使用痕はあるものの汚れの少ないもの」である（表 1）。

- ① 不明（未使用 1 点／総数 1 点）
収集番号 4173 の下駄は未使用。
- ② 地下室（未使用 0 点・使用済み 9 点／総数 9 点）
収集番号 7720, 7725, 7727, 7736, 7737, 7740, 7741, 7742 の 8 点が下駄、7743 のみ草履で、すべて使用済みとおぼしき損傷を受けたものばかりであった。遺言の「ちびた下駄」は、このあたりのものを指していると思われる。後に 2.8 で述べる。
- ③ 2 階（未使用 1 点／総数 1 点）
収集番号 11971 の下駄は未使用。
- ④ オクノマ（使用済み 6 点・使用中 13 点・未使用 9 点／総数 28 点）
収集番号は草履と下駄が混在している。
草履のうち使用済みと思われるものは 12155, 12166, 12171, 12179, 12184, 12185 の 6 点。未使用は 12159, 12162, 12170, 12177 の 4 点。使用中と判断したものは

表 1 履物の使用痕

所在場所	種類	数量（足）	うち未使用	うち使用済み	うち使用中	各合計	総計
不明	草履	1	1	0	0	1	1
	下駄	0	0	0	0	0	
地下室	草履	1	0	1	0	1	9
	下駄	8	0	8	0	8	
2 階	草履	0	0	0	0	0	1
	下駄	1	1	0	0	1	
オクノマの下駄箱の中	草履	19	4	6	9	19	28
	下駄	9	5	0	4	9	
合計		39	11	15	13	39	39

12156, 12157, 12158, 12160, 12161, 12163, 12164, 12167, 12180 の 9 点。

下駄のうち使用済みと思われるものは 0 点、未使用は 12168, 12175, 12176, 12178, 12187 の 5 点、使用中と判断したものは 12165, 12172, 12183, 12188 の 4 点。

オクノマの使用中的のものについては、2.5 で述べる。

2.3 のし紙の有無を調べる

今回抽出した女物と装履物は、履物用の紙箱に入れてあるものが多く、そこに贈答用のし紙がついているものもいくつか見られた。ここでは、箱とのし紙の有無に注目して分類する。というのも、12188 の入っていた箱に「お礼 クラス一同」という、贈答品であることを示すのし紙が掛けられていたが、現在では和装履物を贈答品として贈ることも贈られることもあまりなく、意外に感じられたからである²⁾。箱とのし紙の有無は次のとおりである（表 2）。

- ① 不明（総数 1 点）
 - 箱あり／のし紙なし 下駄 1 点…収集番号 4173。
- ② 地下室（総数 9 点）
 - 箱あり／のし紙なし 計 5 点
 - 下駄 4 点…収集番号 7725, 7740, 7741, 7742。
 - 草履 1 点…7743。
 - 箱ものし紙もなし 計 4 点
 - 下駄 4 点…収集番号 7720, 7727, 7736, 7737。
- ③ 2 階（総数 1 点）
 - 箱あり／のし紙なし 下駄 1 点…収集番号 11971。

表 2 箱とのし紙の有無

所在場所	数量 (足)		総 数	箱あり のし紙なし	箱あり のし紙あり	箱なし のし紙なし
不明	1	草履	0	0	0	0
		下駄	1	1	0	0
地下室	9	草履	1	1	0	0
		下駄	8	4	0	4
2 階	1	草履	0	0	0	0
		下駄	1	1	0	0
オクノマ	28	草履	19	12	6	1
		下駄	9	4	5	0

④ オクノマ (総数 28 点)

- 箱あり／のし紙なし 計 16 点
下駄 4 点…収集番号 12165, 12168, 12176, 12183。
草履 12 点…収集番号 12155, 12156, 12158, 12159, 12160, 12161, 12162, 12163, 12167, 12180, 12184, 12185。
- 箱あり／のし紙あり 計 11 点
下駄 5 点…収集番号 12172, 12175, 12178, 12187, 12188。
草履 6 点…収集番号 12157, 12164, 12170, 12171, 12177, 12179。
- 箱ものし紙もなし 草履 1 点…収集番号 12166 (ナイロン袋に入れられていた)。

以上から、箱の有無に関しては、総数 39 点のうち 5 点以外はすべて箱に入れて保管されている。ただし、箱に記された店名と中に入っている履物の店名が異なるものがあることも判明した。大村さんが病に倒れたあとに他の人が整理した可能性もある。

また、箱に入れられていないものは特に地下室に多く、あとはオクノマに 1 点しかなかった。2.2 の②でも述べたが、地下室のものは使用痕や損傷がかなり激しく、使用済みと判別できるものが多かった。オクノマの箱のない 1 点 12166 も使用済みと思われる。それゆえ、箱にも入れないで保管してあったのだろう。

のし紙の有無に関しては、オクノマに置いてあるもののうち 11 点にのし紙が存在し、他の部屋には存在しないことがわかった。ただし、誰から何の目的で贈られたのかわからない「無地のし」や、店名のみ印刷されたものなどは本人購入や粗品の可能性がある³⁾。

2.4 収蔵品の流通年代について

それぞれの草履や下駄がいつ頃流通したものがわかれば、大村さんが 1 足の草履または下駄をどの程度の期間履き続けたかがわかると考え、和装履物卸業（大阪市浪速区）と小売業（大阪市北区）2 店で写真を示して聞き取り調査を行った。年代推定以外にも気がついた点を指摘してもらった⁴⁾。実物を見せられなかったので確実ではない部分もあるにせよ、同業を 50 年近く営んできている実績から、大きな誤りはないと考える。ただ、和装履物のデザインや素材の中には、時代を特定できるものもあるが、何十年にも渡って変わってないものもある。写真だけでは不明確なものについてはコメントも推定年代も表には記載していない。

大村宅全体でいうと、昭和 20 年代（1945～1954）頃のものと思われるもの（4173）から、病に倒れた 1994（平成 6）年頃（12158, 12159 など）のものと思われるものまで、およそ 50 年近くの期間に販売された女物和装履物があった（表 3）。

部屋別に見ると、不明は戦後すぐのもの、地下室には、草履は 1970～1985（昭和

表3 履物の流通時代

所在場所	収集番号	コメント (2005 年を基準にして)	推定年代	
不明	4173	戦後すぐ	1945～1950	
地下室	7743	20～30 年前くらい	1975～1985	
	7720	戦後～昭和 40 年代	1945～1974	
	7725	戦後～昭和 40 年代	1945～1974	
	7727	戦後～昭和 40 年代	1945～1974	
	7736	戦後～昭和 40 年代	1945～1974	
	7737	戦後～昭和 40 年代	1945～1974	
	7740	戦後～昭和 40 年代	1945～1974	
	7741	戦後～昭和 40 年代	1945～1974	
	7742	戦後～昭和 40 年代	1945～1974	
2 階	11971	昭和 30 年代	1955～1965	
オクノマ	a	12157	30 年くらい前	1975～1985
	b	12158	10～20 年くらい前	1985～1994
	c	12159	昭和 50 年代後半から継続	1984～1994
	d	12161	流通量のピークが昭和 50 年代	1980～1989
	e	12163	20～30 年以上前	1975～1985
	f	12164	30 年以上前	1969～1985
	g	12165	20～25 年前	1980～1985
	h	12166	30 年くらい前	1975～1985
	i	12167	さほど古くない	1990～1994
	j	12168	30 年くらい前	1975～1985
	k	12170	さほど古くない	1990～1994
	l	12172	25 年くらい前	1980 前後
	m	12175	20 数年前	1985 以前
	n	12176	15～20 年前	1980～1989
	o	12179	20 年くらい前	1985 前後
	p	12180	15 年くらい前	1989～1994
	q	12184	15 年くらい前	1989～1994
	r	12185	使用頻度が高い・箱が古い	1980 まで
	s	12187	12168 と同じ頃	1975～1985
	t	12188	12168, 12187 と同じ頃	1975～1985

※オクノマの a～t までのコメントの詳細は注 4 参照。

45～60) 年頃, 下駄に関しては戦後から昭和 40 年代のもの, 2 階は昭和 30 年代のものともまわっており, 判別しやすい。これら 3 つの部屋に置かれたものは, 1994 (平成 6) 年当時は使っていなかったという意味ではひとくくりにしてよいと思う。

オクノマは、日常生活における稼働品が集められ、比較的新しいものが多いのかと思われたが、実際に年代を推定してみると、1969～1994（昭和44～平成6）年頃に至るおよそ25年間に流通したものが同じ場所に混在していることがわかった。また2.2で記したように、未使用品や使用済みとおぼしき使用不能品もあり、すべてが稼働していたわけではない。次項ではオクノマにあった使用中と思われる13点がどのように使用されていたのかを見る。その次に未使用品9点はなぜ未使用だったのかを考察したい。

2.5 オクノマの使用履物の使用目的別考察

2.5.1 使用目的について

オクノマにあった使用中の履物は草履9点、下駄4点である。草履と下駄の使用目的の違いは、端的に言えば、草履は外出用、下駄は日常用ということになる⁵⁾。

2.5.2 使用中の草履

草履に関しては、まず夏用かそれ以外の通年用かという大きな区別がある。その区別の基準は台表の素材で、夏物はパナマやシザールといった植物繊維を編んだものが多い。

通年用には、普段用（電車に乗らない程度の距離）・お洒落用（電車には乗るがフォーマルな場所には行かない場合・食事や買物など）・準礼装用（パーティなど）・礼装用（結婚披露宴や授賞式など）と、TPOによる区別があるが、夏用はもともと植物繊維を編んだカジュアルな素材であることから、準礼装・礼装用には用いないと考えてよい。また、その使用目的についても厳密に線が引かれるのではなく、「お洒落～準礼装まで」「準礼装～礼装まで」というように品物によって多少の幅がある。区別の基準は材質（皮革か合成皮革か／皮革か布帛か）・デザイン（無地か柄物か／鼻緒の太さも、太いほどカジュアルになるなど）・色（押さえた色調か否かなど）・台の高さ（高いほどフォーマル・低いほどカジュアル）などである。以下に示す区別はそれらの要素を考慮して判断した。唯一の例外は、台が防水加工済みのコルクを用いた晴雨兼用の12164である。TPOではなく機能面で分類してある。2.6で後述する雨の日に履く草履は、12164を指していたのかもしれない。

使用中の草履は以下の通りである（表4）。

① 夏用（3点）…収集番号12156, 12158, 12163。

 普段用（2点）…収集番号12156, 12163。

 お洒落用（1点）…収集番号12158。

大村さんは夏は主に普段着をアッパッパにし、外出着だけを和服にしていたという。夏用に3点もあれば十分事足りたと思われる。

表4 使用中草履の使用目的

区別	数量 (足)	普段用	お洒落用	準礼装用	礼装用	晴雨兼用
夏物	3	2	1	0	0	0
通年用	6	1	2	2	0	1

② 通年用 (6点)…収集番号 12157, 12160, 12161, 12164, 12167, 12180。

普段用 (1点)…収集番号 12157。

お洒落用 (2点)…収集番号 12160, 12161。

準礼装用 (2点)…収集番号 12167, 12180。

礼装用…なし⁶⁾。

晴雨兼用 (1点)…12164。

大村さんは随筆家として、テレビ番組や雑誌のインタビューなどのメディアへの露出も多かった。お洒落用3点はそのためのものではないか。また、出版記念パーティなどの華やかな席には、準礼装用2点が稼働していたのではないか。

2.5.3 使用中の下駄

下駄に関しては、晴天用・雨天用・晴雨兼用といった、天候に対する機能による区別が第一となる。その区別は歯の形によるところが大きい⁷⁾。

晴天用でもっとも一般的な二枚歯は「日光」(写真1)と呼ばれる。高さは様々である。「右近」(写真2)と呼ばれる台が少しカーブしたものは、昭和初期に「シューズ履き」として開発された、靴の形状をまねたもの(市田 2003: 149)。低めで歩きやすい。裏にはゴムが貼ってある。

雨天用下駄とされる「高下駄」(写真3)は、雨の跳ね返りで裾を汚さないために、歯は高く細くなっている。路面と触れる面積が小さい方が跳ね返りが少ないためであろう。高さは9cm前後。

それよりも少し低くなったものが「利久(利休とも)下駄」(写真4)で、5~6cmの高さだが、晴雨兼用とされる。爪掛けをつけて雨の中を出かけ、途中で雨が上がったなら爪掛けをはずして晴天用として用いる。ただし舗装道路が増えてからは、利久でも歩きにくいいため「時雨下駄」(写真5)が開発された。利久と同じような高さだが歯

表5 使用中下駄の使用目的

区別	数量 (足)
晴天用	3
晴雨兼用	1
雨天用	0

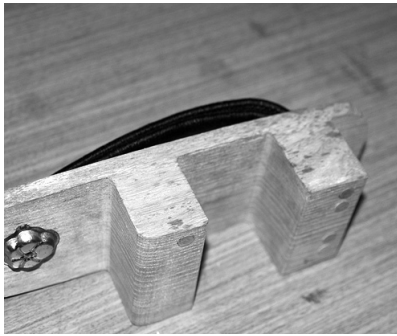


写真1 日光



写真2 右近



写真3 高下駄

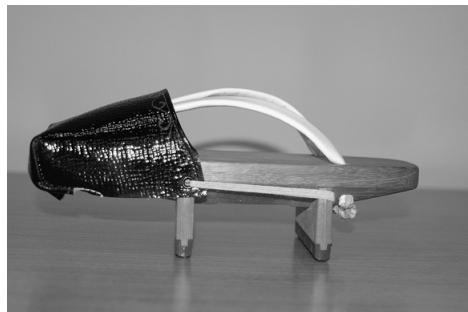


写真4 利久

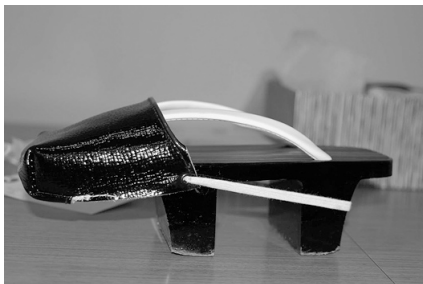


写真5 時雨下駄

がたく安定感がある。二枚歯で日光に似たものだが、歯の前後がカーブし、路面に当たった雨水がカーブに当たって落ちるように工夫されている。これも、途中で雨が上がったなら爪掛けをはずして晴天用のような使い方ができるというものである。現在の感覚としては、利久は雨専用、時雨が晴雨兼用とらえた方が妥当であろう。

使用中の下駄は以下の通りである。

- ① 晴天用 (3点)…収集番号 12165, 12172, 12183。
- ② 晴雨兼用 (1点)…収集番号 12188。
- ③ 雨天用 (0点)…なし。

下駄の種類の区別の第二には、台の素材・台表の有無・塗りの有無となる。大きく分けて漆塗りか白木かの2つが主流だが、台表を張っていない「天履」^{じかばき}で白木の場合、雨や皮脂に弱いので、基本的に雨の日には用いないし、素足で履くと足の脂が移り、台が黒ずむので避けるべきとされる。

次に台にデザインを施してあるか否か。一般的には鎌倉彫や螺鈿細工、金彩などが施されたものもある。

晴天用の3点を比べてみると、12165は黒漆塗りの日光。鼻緒にかなりの傷みや使用度があり、愛用したあとが窺える。歯も摩耗し、塗りも少し剥けている。

12172は鎌倉彫の右近。側面の塗りが剥げ、底面も修理あとがある。かかとは靴修理用のゴムを貼ってあり、小売店・卸業双方から、この仕上げは履物屋の仕事ではないという指摘があった。方法の是非を問わず、なんとしても修繕して使いたいという意欲の表れかと解釈した。

12183は白木の日光。前述2点は素足でも履けるが、12183のような白木素材のものは、素足で履くと足の裏の脂が台に染みつくので、足袋を履いた方が良いとされる。歯の摩耗から見てかなりよく履いていると思われるが、台表はきれいなままであるところから、素足では履かなかったと思われる。

12165は特に夏に履くのに適しているし、12172は通年使える。晴天用下駄が3点あるといっても、それぞれ使用目的にあわせて選択されており、同じようなものが重複しているわけではない。

晴雨兼用の12188は黒刷毛目(漆を刷毛目が出るように塗ったもの)台にビニールの鼻緒をすげ、爪掛けをかけている。歯の摩耗・砂利の食い込みなどから見て、よく使用されている。爪掛けも一部損傷している。商品の機能的には晴雨兼用だが、実際には雨天専用として用いていたのではないだろうか。

2.6 オクノマの未使用履物の考察

オクノマにあった未使用の履物は、草履4点、下駄5点である。

未使用の草履が存在する理由として考えられるのは、近い将来使用予定があり、購入しておいた、いただき物だが趣味に合わないので放置してある、現在使用中のものが消耗がひどく、その代替品としてストックしてある、特に使用予定はないが、あまりに素敵だったので、あるいは安かったので買ってしまった、などが考えられる。

未使用のまま保管されていた履物は、衝動買いによる死蔵品だったのか、無用の長

表6 未使用草履の使用目的

区別	数量 (足)	普段用	お洒落用	準礼装用	礼装用
夏物	0	0	0	0	0
通年用	4	0	3	1	0

物だったのか。ここでは未使用履物の使用目的・形状などからその理由を推察したい。

未使用の草履は以下の総数4点である (表6)。

- ① 夏用 (0点)
- ② 通年用 (4点)…収集番号 12159, 12162, 12170, 12177。
 - 普段用 (0点)
 - お洒落用 (3点)…収集番号 12159, 12162, 12177。
 - 準礼装用 (1点)…12170。
 - 礼装用 (0点)

夏用未使用草履が見あたらないのは、使用頻度がきわめて低いものをストックしておく必要性がなかったためであろう。

通年用のうち普段用の未使用品がないのは、現在使用中のお洒落用が古びたら、それを普段用におろせるため、わざわざ用意しておくこともなかったのではないだろうか。

お洒落用の 12159 はエクセース[®] 総貼り台に、輪奈ビロード・裏は本天の鼻緒がすげられた、たいへんお洒落なものである。安価なものではないが礼装には使えず、使用后古びたとしても普段履きにおろすには少しもったいない気がするような、たいへん贅沢なものだと思われる。大村さんの堅実でつましい生活ぶりからすると意外な品といえそうだ。しかしこれにはのし紙も見あらず、また、履く当人が鼻緒の調節をしてもらった形跡があるため、贈答品の可能性は低い。かなり思い切った購買行動だったのではないだろうか。

同じく 12162 は紺無地メタリックエナメル台におそろいの革と赤のラインの鼻緒がついたもの。これは使用中の 12161 に色味が似ており、12161 の損傷・摩耗が目立ってきているため、その代替品としてストックされていたのではないかとと思われる⁹⁾。

12177 は 2.3.1 で見たように「箱あり／のし紙あり」で、のしには「御禮 紫古」とある。履物本体と箱の店名が一致するため、これに関しては贈答品だと考えて良さそうだ。これも使用中の 12180 と似たデザインのため、その後継としてストックされていたように思われる。

未使用の下駄の総数及び使用目的は以下の5点である (表7)。

表7 未使用下駄の使用目的

区別	数量 (足)
晴天用	2
晴雨兼用	2
雨天用	1

- ① 晴天用 (2点)…収集番号 12175, 12178。
- ② 晴雨兼用 (2点)…収集番号 12168, 12187。
- ③ 雨天用 (1点)…収集番号 12176。

晴天用 12175 の台は白木の日光。無地のしが掛けられた箱の中にあり、この箱が元来のものだったとするならば、贈答品もしくは記念品や粗品だった可能性がある。かなり長い間保管したらしく、台にシミができてしまっていて、新品未使用ではあるが今さら使えないという状況に陥り、そのまま保管していたのかもしれない。

晴天用 12178 も白木の日光。これもまた無地のしつき。使用中の 12183 の後継として保管されていたのだろうか。

晴雨兼用の 12168 の形は時雨、塗りは黒出し（黒漆を刷毛目が縦横に出るように塗ったもの）。「ぎをん時雨」という商品名が書かれた紙が同梱されていた。12187 は形も塗りも 12168 と共通。ただ、これには無地のしがついているため贈答品の可能性も検討したが、和装履物店で購入した際、贈答品でなくとも無地のしを掛けることがあるため、本人による購入の可能性もある。使用中の時雨 12188 の後継は 2 点もあったといえる。

雨天用の 12176 は利久。2.4 で見たように、現在から 15～20 年前、1980～1989（昭和 55～平成元）年頃の商品であろうと思われる。この年代設定を基準とするならば、1994（平成 6）年当時から振り返っても 5～14 年間保管し続けたことになる。細い歯では舗装道路が歩きにくくなったことと、舗装されたおかげで泥はねが少なくなったため、時雨下駄で十分ということになり、死蔵していたのだろうか。利久の特長は歯が台とは異なる材質のものを差し歯はにしている点である。桐の台に檜や朴の歯を差しであることが多い。檜や朴は桐よりも堅く丈夫で、たとえ損耗しても歯はだけ差し替えられるというのが利点である。

2.7 利久（利休）下駄に関する大村しげの文章

ここで少し話は寄り道するが、大村さんが「利久」について書いた文章を引用してみよう。

ただ「りきゅう」とだけ呼ぶ日よりげた。キリの台にホウの二枚歯をいれて、歩くとキュッキュ、キュキュと音がする。

空を仰いで首をかしげのお天気にもはいて出られるけれど、アスファルトの道はりきゅうを追放して、ぞうり一点張りとなる。このごろでは、雨の日にでもぞうりばき。足あたりのやわらかさに慣れると、げたの歯のあたりは堅い。

——けれど、チラチラと小雪がちらつく曇り空の日、寒さのやわらいだころに降る雨の日。高下駄をはくほどのたいそうさもないときは、このりきゅうに向こう掛けをかけた足もとが、キリリと美しい。りきゅうをいとうのは晴れた日のこと。雨降りには、歯のあるげたにこそ、足どりも軽い。シャキッとした気の張りがそぶりにも現れて、雨の女が美しいのも、この足もとから。

雪のあと、大通りのかわきに気をゆるしても、横の小路はまだぬかるんでいる。そんな道への気がねもいらぬ。それに歯入れる便利さも——。

よそおいの美しさは、調和を求める。雨の日には雨足のはげしさで、高げたとりきゅうをはきわけ、舗装道路といなか道にも好みをかえてはじめをつけたえらび方。

実用とおしゃれと気構えと、そんな心のふれあいを、一足のりきゅうの中に見つけ出す。
(大村 1965.2.2)

……京の雨は、町なかではまっすぐに降る。すると、ほこりが流されて、屋根の瓦がひときわつやを増す。わたしはさっそく、きものを少うし短いめに着て、蛇の目をさし、利休の歯をキュッキュッといわして、出かける。

(大村 1984)

2つの文章から、大村さんは「利久」に対して「雨の日の女の美」といった価値を感じており、思い入れがあったことが窺える。ただ1965（昭和40）年時点ですでに、つつい草履を履いてしまう傾向にあったようだ。しかし2つめの1984（昭和59）年の文章がフィクションであったにせよ、雨の日には利久、という美意識はまだ残っている。

12176の利久が使われないまま保管されていたのは、「実用には向かないが、好きなので持っていたい」という気持ちからだったのかもしれない。あるいは歯の先に三平式ゴム¹⁰⁾が取り付けられた品が登場したので、少しは履きやすくなったかもしれないという期待を込めて購入したものの、さして差がなかったか、または歩き心地が気に入らなかったのか。未使用だったところから考えると、せいぜい室内で試し履きをしたくらいと思われるので、舗装道路の上での歩き心地までは確認できなかったかもしれない。またはその後「時雨」が登場し、そちらの方が履きやすかったので使用しないままだった可能性もある。

では、実際のところ、利久をキュッキュ、キュキュと履いていたのはいつ頃だったのか、また、その頃のものとはどれなのか。それらは地下室にあった使用済み下駄8点の中にあるのだろうか。

表8 使用済下駄の使用目的

区別	数量 (足)
晴天用	2
晴雨兼用	2
雨天用	4

2.8 地下室の使用済み履物の考察

地下室にあった使用済みの履物は、草履1点、下駄8点の総数9点である。

草履は使用済みのもの1点、収集番号7743である。これは夏物で、かつどちらかという目安なもので、ビニール製の鼻緒が伸びきってしまっている。鼻緒を替えれば使用可能かもしれないが、そこまで手を掛けるほど台が上等ではないと思われる。

使用中の夏物草履で十分用は足りるのだが、見た目もそこそこきれいで、捨てるに捨てられなかった、という印象だ。または、安物買いの銭失いをしたことを後悔して、自戒のために残しておいたのかもしれない¹¹⁾。

下駄は以下の通りである(表8)。

使用済み(8点)…収集番号7720, 7725, 7727, 7736, 7737, 7740, 7741, 7742。

晴天用(2点)…収集番号7736, 7741。

晴雨兼用(2点)…収集番号7737, 7740。

雨天用(4点)…収集番号7720, 7725, 7727, 7742。

7736は桐白木だが、天(台の表面)に経木を貼っている、天貼り日光。摩擦により天がところどころ剥げ、歯の摩耗もひどい。鼻緒は玉虫本天だが経年劣化で毛が抜けている。

7741は台の形こそ利久だが、台表が竹の皮でできた畳表。「吾妻下駄」と呼ばれるものようだ(三省堂百科事典編集部2005:377)。また、少しの使用痕しかなく、状態もよい。しかし、使用するつもりはなかったせいか、地下室にあった¹²⁾。

7737は天のみ黒漆が施された「天変わり日光」だが、爪掛けとともに収納され、鼻緒の縫い糸から色落ちしているので、雨天に用いられたと考えられるが、爪掛けをはずせば晴天用として通用する。

7740は爪掛けがあることと鼻緒がビニールであるところから見て、雨用に用いられていたようなのだが、歯の形状が日光のようにも見える。しかし日光は一般的に、台と歯が一体型となった「真物」なのだが、これは歯が継いである差し歯のようだ。また、台・側面ともに白木なのだが、裏の二枚歯の間だけ黒漆仕上げになっており、これは現行品では見られない仕上げだという¹³⁾。時雨下駄が発売される前段階のもの



写真6 使用済みの雨天用下駄の歯の状態

だろうか。これも、爪掛けさえはずせば晴天用になりうる。

7720は、桐白木利久。現在では雨天用に白木のは見かけないが、かつてはあったようだ。鼻緒がビニールで爪掛けもあるのでおそらく雨天用だと考えた。後ろ穴付近に台が擦れた跡があることから、使用頻度が高かったと考える。

7725は、鎌倉彫利久で、一番目を引くのは、歯の摩耗のしかたである。摩耗した歯のうち強い繊維質だけが残り、それが歯の下の周囲に付着している。差し歯が朴だと、このような「ひげ」が歯の周囲に付着しているのは当然だったようだ。

7727の歯も同様に朴の繊維が歯に付着している（写真6）。台は黒漆だが、かなりよく履いたらしく漆の剥げが目立つ。

7742は7725と似た、鎌倉彫利久。同様に朴の繊維質が付着している¹⁰⁾。

これらの使用済み雨天用下駄4点が、おそらく2.7で引用した「キュッキュ」と音を立てて歩いた頃の利久だったのかもしれない。

2.9 使用痕からわかること

7725・7727・7742の3点によって、朴歯の特徴的な「ちび方」を確認することができた。それ以外にも、大村さんの使用痕や、購入店により判明したことを以下に述べる。

今回、大村さんの使用中または使用済み履物の写真を見せて協力してもらった業者のみなさん6名が、口をそろえておっしゃったことは、きれいに履いている、ということであった。下駄に関していうと、保管／保存状態が悪くほこりまみれのものもあったが、使用に伴って摩耗していく、その減り方が均一で、おかしな足の癖がないことがわかるという。また摩耗する部分も歯の裏と爪先側の裏だけで、台の側面や表面にはあまり損傷がない。慣れない人や癖の悪い人の履いたものは、台や歯が欠けたり、斜めに摩耗していたりするのだそうだ。

草履は裏を見れば、メンテナンスの頻度がわかるという。かかとのゴムが摩耗してくると、土踏まずあたりの裏が地面に着き、汚れやすくなる。つまり、ゴムが減りす

ぎない時点で取り替えていけば、裏ゴムの土踏まずあたりはいつまでも白いままなのだ。かかとのゴムが減りすぎてから取り替えても、すでに底のゴムまで減ってしまっていたり、台のかかとの革が傷まみれになっていて、取り返しがつかない。

大村さんが履き古したものを残しておいてくださったことと、専門業者の目を借りることによって、履物はどのようにすれば長くきれいに使えるのかが理解できたと思う。

2.10 購入のしかたについて

購入のしかたについては、気に入ったデザインのことを履き続け、そろそろ損傷がひどくなってきたかな、というあたりで、よく似た後継を用意しているという推測が正しければ、計画性のある周到さを感じられる¹⁵⁾。また、自分の好きなものがはっきりしているからこそ、前もって用意しておくことができたのだと思う。

また、大村さんの購入先が京都市内でも複数の店舗に渡っていることが、業者の方には意外に感じられるという指摘があった。というのも、長く和装履物を履いている人は、たいていは気に入った行きつけの店のものばかりになるものらしく、鼻緒のすげ方などは、いつも同じ職人さんであれば細かい注文をつけなくてもすむし、好みに合った取扱商品の店に行けば、確実に気に入るものが購入できるので、固定化する傾向があるという。

その違いの理由として考えられるのは、大村さんが京都について書く随筆家であり、特定の店舗に固定しては仕事に差し支えが出るため、複数の店舗とおつきあいをする職業上の必要性があったのかもしれない。また、贈答品が多かった場合は、本人が選んだわけではないので、複数の店舗のものが混在するのも当然であろう。

今回、包装紙や箱、のし紙も一緒に見られたことにより、贈答品としての側面に着目できたことは有意義であった。一切切を残そうとしてくれた大村さんのおかげであると思う。

3 今後の展望

対象物が故人の持ち物であり、本人にインタビューすることはできないため、本稿では何がどれだけのようにあるか、それはいつ頃のものか、などを特定するのにとどまった。さらに、それらの分析も確実とはいえず、仮説としかいえない。今後、さらに精度を高める方法そのものについても研究の課題となるだろう。

裏付けをする一つの方法としては、大村さんのスナップ写真に写っている和装履物を探し、使用状況の確認をすることは可能かもしれない。ただし、スナップ写真というものは足もとまで写っていないことが多いのも事実で、これだけでは不十分だろう。

テレビ出演時のビデオテープや雑誌掲載の写真なども調べてみる必要がある。また販売店がわかっているものについては、店舗へのインタビューも併せて行えるとなおのこと良いと思う。

謝 辞

調査に際しては、以下の方々にご協力いただいた。ここに謝意を表したい。

- 株式会社森弥商店（大阪市浪速区）
- よこづなや履物舗（大阪市北区）
- 和装履物保有実態調査にご協力くださった皆様

注

- 1) 和装履物が39足あったことについて、独身の男性共同研究会メンバーから「履物など3足もあれば足りる、多すぎるのではないか」という指摘があった。既婚の男性共同研究会メンバーからは「妻と娘の靴で下駄箱はいっぱいだから理解はできる」、女性研究会メンバーからも、さして意外な数字だとは思えないというコメントが出たのだが、一般的に見て多いのか少ないのかを判断するために、この調査と平行して「女物と和装履物の保有数」を調べてみた。対象者は自分で着物を着ることのできる人14名、年代は30～60代、居住区域も出身地もバラバラである。うち1名（40代・北海道在住・出身）のみ実数ではなく、記憶の中にある概数を知らせてくれた。子供や家族すべてのものを含んで、だいたい40足弱とのこと。他の13名が実際に数えて報告してくださった数（稼働品・死蔵品含めて）は、4足1名（30代・大阪府在住・出身）・7足1名（30代・東京都在住・新潟県出身）・8足1名（60代・新潟県在住・出身）・10足2名（40代・米国在住・静岡県出身／40代・愛知県在住・広島県出身）・12足1名（30代・大阪府在住・富山県出身）・14足2名（40代・愛知県在住・出身／40代・大阪府と京都府在住・奈良県出身）・16足1名（50代・奈良県在住・出身）・23足1名（30代・高知県在住・山口県出身）・37足1名（50代・神奈川県在住・出身）・42足1名（40代・大阪府在住・出身）となった。42足と答えた人は下駄マニアなのであまり参考にしない方がいいと思われる。標本数が少ないので統計学的には使えない数字だが、おおよそ12足前後は着物を着る人にとっては不自然でない数字だと考えてよいのではないと思う。ただし、これらの人々は普段は洋服で生活しているため、これらに加えて靴も保有している。また、大村さんが76歳当時の保有数であり、およそ20年間の蓄積であることや、着物が普段着であり、公人としての外出が多かったことをあわせて考えると、39足は多すぎるとはいえないと考える。
- 2) 和装履物を贈答品として扱う習慣は、昭和40年代までは存在した。聞き取り調査によると、和装履物小売店からも、長唄などの稽古に通った人からも、弟子からお師匠さんにお中元・お歳暮として下駄や履物を贈る習慣があったという証言が得られた。和装履物小売店によると、その習慣が途絶えたのは、1970（昭和45）年1月に発行され大ベストセラーとなった『冠婚葬祭入門いざというとき恥をかかないために』（塩月弥栄子1970）の影響が大きいという。この本によって「足で踏みつける履物を目上に人に贈るのは失礼だ」という認識が一般に広まり、贈答品としての販売数が激減し、履物関係の団体から著者へ抗議を行ったという記憶があるという。その本文を確かめてみると、実際には結論としては贈答品としての履物を否

定してはいないのだが、大いに誤解されやすかったことは確かである。「353 目上の人にも、はきものを贈ってもよい」「……目上の方には、はきものや下着類を贈るのは失礼とされていました。……このように、贈り物についてのタブーは、相手が気にする場合は避けた方がよいでしょう。／……しかし……身につけるものの中でもっとも重宝ないたきものは、下着とはきものだと思っています。要は、相手の人柄に応じた贈り物を選ぶことです（塩月 1970: 214）。

この文章では、すでに既存の事実として「履物を目上の人に贈ってはいけない」という認識があるという表現から始まって、後段でひっくり返しているのだが、最終的にはケースバイケースですよ、という曖昧な終わり方である。これを読んだ読者は「わざわざ履物を贈って憤慨され恥をかきよりも、ほかのものにしよう」と、無難な方向を選択したのだろう。筆者の手もとにある同書は 1970（昭和 45）年 10 月発行のものだが、すでに 206 版を重ねている。影響力はかなり大きかったものと思われる。

この 2 年後『きものの常識ちよびり差をつけるための 400 項』（酒井美意子 1972）が発行され、ここでも贈答品としての履物が取り扱われている。「252 ぞうりを贈り物にしても失礼ではない」「履物を目上の人に贈るものではない、と信じている人が多いのはどうしてでしょうか。足で踏みつけるからという理由は、あまりにもコジつけです。私は、いろいろお世話になったかたにぞうりを贈っては、いつも喜ばれています。……」（酒井 1972: 167）。

この本は初版から 5 年後に 21 版となっており、一般的にはベストセラーだが『冠婚葬祭入門』には遠くおよばず、よって、「履物は贈答品として不適切」という認識を覆すほどの影響力を持つには至らなかったようだ。昭和 50 年代以降は、和装履物が贈答品として用いられることはほとんどなくなったと考えていいと思うが、そんな中でも大村さんの保有品の中には贈答品としての履物が存在するのが特徴的だといえよう。

- 3) 呉服屋の展示会などで「ご成約プレゼント」として草履が用いられ、無地のしが掛けられる場合があるので、のしイコール贈答品という断定はできない。また、使用者本人による購入の場合でも包装の一部として、無地のしを用いる店舗もある。
- 4) 年代推定の基準となったコメントの詳細は以下の通り。
 - ① 不明（1 点）…4173 の下駄。商標の記載のしかた「香取屋川崎商店本店京祇園全店九条高倉」から見て、戦後すぐの商品ではないか。
 - ② 地下室（9 点）…草履 1 点：7743 は、鼻緒の素材が「アルロン」と呼ばれるビニール製であるところから、今から 20～30 年前のものではないかとのこと。1975～1985（昭和 50～60）年頃のものとして推定される。下駄 8 点：戦後～昭和 40（1945～1974）年代までのものではないかとのこと。
 - ③ 2 階（1 点）…11971 の台の素材が良質であること、昨今あまり見たことがない鼻緒であることから、昭和 30 年代（1955～1965 年）までのものではないか。
 - ④ オクノマ（28 点）に関するコメント。
 - a) 12157 は鼻緒の細さから見て 30 年くらい前のものだろうとのこと、1975（昭和 50）年前後のものか。
 - b) 12158 は現行品では見られない素材を使っているため、10～20 年前のものと思われるそうだ。1985～1994（昭和 60～平成 6）年頃までのものか。
 - c) 12159 は昭和 50 年代後半からデザインが変わらず継続している上に未使用なので推定しにくい。1984～1994（昭和 59～平成 6）年頃の間購入したものではないか。
 - d) 12161 は台表が牛革メッシュで、これが登場したのが昭和 40 年代（1965～1974）、ピークが昭和 50 年代（1975～1984）、昭和 60 年代（1985～1989）にもまだ流通していたと

のこと。使用状況から見て、かなり履いているが1994年まで30年近くの使用は無理だろうという見解から、1980年代（昭和55～平成元）の購入ではないかとのこと。

- e) 12163は台の素材が天然素材に似せたビニール型押しであるところと、鼻緒の細さから見て20～30年以上前、1975～1985（昭和50～60）年頃ではないか。
- f) 12164は台側面がコルク剥き出しで革を貼っていない。これは良質のコルクを使わなければならないデザインなので高級品だそう。さらに、コルクにニス塗りをし、防水加工してある。コルク剥き出しのものは現在でも流通しているが、ニス塗りは今は見られない。おそらく30年以上前のものではないかとのこと。和装履物保有実態調査協力者の所持品の中に、販売店もデザインも材質も同様のものがあった。1969（昭和44）年の結婚の際に購入したものととのこと。よって、1969～1975（昭和44～50）年頃のものか。
- g) 12165は、台の裏の後ろの鼻緒のすげ方を見て、本草（麻紐）で丁寧な巻き方をしており、腕のいい職人仕事であるところ、現在ではほとんど見られない「赤檜」を差し歯に用いているところから、20～25年前のものではないかという。1980～1985（昭和55～60）年頃ということになるか。
- h) 12166の鼻緒も7743と同様、素材がアルロンというビニール素材であることから、30年くらい前、1975～1985（昭和50～60）年頃のものではないか。
- i) 12167は現行品でも同じデザインのもので流通しており、さほど古いものではない。使用痕からも使用頻度が低いと見られ、1990年代になってからの購入ではないかということだった。
- j) 12168は時雨下駄という、雨天用のもの。それ以前の雨下駄＝利久下駄と高さは変わらないが、歯がたく安定感があるもので、30年ほど前に開発され登場した形だそう。現在の時雨下駄には歯の裏にゴムが貼ってあるが、これにはない。そのことと、鼻緒のデザインが少し古くさい印象であることから、時雨下駄登場初期のものだろうという判断で、1975～1985（昭和50～60）年頃のものとして推定された。
- k) 12170は未使用のため使用痕から推定できないが、デザインも現在とあまり変化のないものであるところから、これも1990年代以降のものとして推定された。
- l) 12172はかなり使用され、傷みも目立ち、修理跡も顕著である。デザインから判断して25年くらい前のものではないかという。1980（昭和55）年前後のものか。
- m) 12175は未使用なので、鼻緒も交換されていない。そのため、台と同年代のものと考えられる。鼻緒のデザインから判断して20数年前とのこと。少なくとも1985（昭和60）年より以前のもののようだ。
- n) 12176は15～20年前だという。その根拠は、差し歯の先に茶色いゴムが圧着されている点。その圧着方式が「三平式」と呼ばれる方法で、15～20年前に開発されたが、5年ほど前からもう施されていない。また未使用のまま保管されているうちに、やや鉛色に変色しているところから、ある程度の期間しまい込んでいたと考えられる。1980～1989（昭和55～平成元）年頃の商品であろう。
- o) 12179の鼻緒は別珍の太い丸ぐけで、現在ではほとんど見かけないものである。その流通が20年ほど前に盛んだったことと、裏のゴムの修理あとから見て、かなり長期間に渡って使用された形跡があるので、1985（昭和60）年前後の購入ではないかと見られた。
- p) 12180は、デザインからすると比較的新しい、15年ほど前のものではないかという。使用痕も淡く、平成に入ってからのものである。1989～1994（平成元～6）年頃

か。

- q) 12184 も 15 年ほど前のデザインだという。こちらは台も汚れ、使用済みと判断できるほど使用頻度が高い。年代的には 12180 と同時期。
- r) 12185 は箱のデザインが古い。また、修理サービス券が同梱されていた。このような券が配られたのは、1980 年代までのことだそう。団塊の世代のお嬢さんたちの嫁入り道具に 10 足単位で売れた頃で、1988～1989（昭和 53～54）年までがピークだったそうだが、各店がサービス合戦を繰り広げていたらしい（ただし、草履もサービス券も、もともとこの箱に入っていたかどうかは不確実なので、これだけに依拠するのは危険）。草履の台もかなり汚れ、損傷しており、使用頻度が高いことから 1980（昭和 55）年までのものではないかと推定された。
- s) 12187 も時雨下駄。特に流行がないタイプである上に未使用なので時代が特定しにくい。ただ、歯の裏にゴムが貼られていないことから、12168 同様、1975～1985（昭和 50～60）年頃のものではないか。
- t) 12188 もまた時雨下駄。これは使用痕がある。黒漆の剥げや歯の裏の砂利など、愛用していた様子が窺える。12168、12187 と同様、歯の裏にゴムが貼られていない点から見て 1975～1985（昭和 50～60）年頃のものではないか。

以下は不明確だったため表に記載しなかったものについてのコメント。

- 12177 は、現在も流通している定番で未使用であるため、1990 年代以降のものかもしれないが確証はない。
- 12183 は歯の磨減や砂利の食い込みなどからしてよく履いていたものだと思う。鼻緒が現行品に似た感じのもので、取り替えた可能性もあるが、鼻緒裏の生地が現行品よりも上質なので、全く現行品ともいいかねる。

- 5) 厳密に言うと草履の中でも日常にしか履けないものもあるし、礼装にまで使える下駄もある。
- 6) 夏用の 12156 は台表シザールの編み方が粗いことから、また 12163 は台表が天然素材に似せたビニール型押しであるところから、普段用と判断した。12158 は台表の編み目が比較的細かいこと、鼻緒裏が本天使用で高級であることなどから、お洒落用と判断した。通年用の 12157 は台の高さが低く、柄があることから礼装用には不向き。普段履きからお洒落用までが使用範囲と見なした。
12160 はエナメル素材で無地だが鼻緒が臙脂でややカジュアルな印象。12161 はメッシュ素材で礼装用向きではない。12164 はコルクが剥き出しになっているので礼装には不適切。
12167 は台と鼻緒の色・素材が共通で、もちろんお洒落用にも使えるが、準礼装まで使える品格がある。12180 も同様。
- 7) 下駄の台の呼称には地方差がある。また、日光によく似た「^{よしちょう}芳町」という台は、「日光より高く、歯の下が開いてある」（三省堂百科事典編集部 2005: 377）が、煩雑になるため本稿では二枚歯のものを一括して、「日光」と分類した。
- 8) エクセースはスエードに似せた合成皮革だが、感触が柔らかく水に強いのが特長。鼻緒の裏にもよく用いられ、和装履物ではなじみのある素材。
- 9) これは使用済み草履 12189 と使用中草履 12160 にも当てはまる。どちらも白っぽい台に赤い鼻緒という組み合わせで、おそらく 12189 の汚損が著しくなったため、12160 に履き替えたのだらうと考えられる。
- 10) 「三平式ゴム」については注 4 の n) 参照。
- 11) 注 1 の調査協力者に「使用済みでも残してある和装履物の有無と捨てない理由」も質問して

みたところ「何となくもったいなくて」「高かったので」に混じって「安物買いの銭失いの証拠として、自戒の意味を込めて残してある」という回答があった。

- 12) 雨下駄で、雨に弱い畳表（竹の皮）の台表のものは、「京都だけにある表附」（三省堂百科事典編集部 2005: 377）の雨下駄と呼ばれる。7741 は雨下駄ほど高くないが、その系統を汲むものであると思われる。現在一般に流通している雨下駄・利休ともに、畳表のものはほとんど見かけない。
- 13) 側面と裏に塗りを施し、台表だけ塗らないものは「面生かし」と分類されるが（三省堂百科事典編集部 2005: 377）、この例は側面も塗っていないので当てはまらない。
- 14) 今回、筆者は朴歯がどのように摩耗していくのかをはじめて目の当たりにした。桐の下駄の減り方は体験上わかるが、朴歯は繊維質が付着するような減り方だとはまったく知らなかった。戦前の小説にも登場しているような朴歯の下駄を履いた書生さんや学生さんの下駄の歯も、同様に繊維が付着していたのだろうか。筆者の感覚では、それはあまり美しいとは思えなかった。「ひげ」を手入れすることはなかったのか、履物小売業、店主に問うたところ「こうなるのが当たり前」という認識であったという。今でいえばデニムのジーンズが色落ちするのは当たり前、という感じの認識だったのか。また、手入れしようにも堅い繊維質なので刃物の方が負けたらしい。バンカラと呼ばれる人たちの間では付着物が多ければ多いほどかっこいい、というような認識も、ひょっとしたらあったのかもしれない。『脚・フェティシズム フロイトを蹴飛ばす脚・靴・下駄理論』（石塚正英 2002）によると、男子学生がバンカラの象徴として下駄履き通学していたのは 1970（昭和 45）年頃までだったようだ。新潟県の元旧制高校の話であるので、地域によってはもっと早く見られなくなったのかもしれない。
- 15) いつでもある、いつでも買える、と思っていると、いざ必要ときに「売っていない」「たまたま気に入ったのがない」「お金がない」「店自体がない」ということになるものだ。

文 献

石川英輔

2003 『ニッポンのサイズ』京都：淡交社。

石塚正英

2002 『脚・フェティシズム フロイトを蹴飛ばす脚・靴・下駄理論』廣済堂。

市田京子

2003 「はきものー開放性から閉塞性へ」日本生活学会編『生活学第 28 冊 衣と風俗の 100 年』pp. 145-172, 東京：ドメス出版。

大村しげ

1984 「六月の雨の日、京おんなは新のごんぼを煮いて」『サンデー毎日』6月24日号：152-153。

酒井美意子

1972 『きものの常識』東京：主婦と生活社。

三省堂百科辞書編集部編

2005 『婦人家庭百科辞典 下』東京：筑摩書房（初出は 1937 年、三省堂）。

塩月弥栄子

1970 『冠婚葬祭入門』東京：光文社。

宮本馨太郎

1968 『かぶりもの・きもの・はきもの』東京：岩崎美術社。

矢田部英正

2004 『たたずまいの美学』東京：中央公論新社。

新聞記事

大村しげ

1965.2.2 「りきゅう」『朝日新聞』